平成4年(1992年)10月4日　第2号

INFOS
日仏整形外科学会広報誌 アンフォ

会長 七川歓次
Président: K. SHICHIKAWA
副会長 菅野卓郎
Vice-Président: T. SUGANO
副会長 小野村敏信
Vice-Président: T. ONOMURA
書記長
Secrétaire général: 小林 晶
A. KOBAYASHI
事務局:
大阪医科大学
整形外科学教室内
Tel.(0726)83-1221代表
(内)2364
学会専用Fax.(0726)82-8003
Bureau:
Osaka medical college
Dep. of Orthopedic Surgery
Takatsuki, OSAKA 569 Japan

会長挨拶

第4回日仏整形外科学会を開催して

七川　歓次

第4回の日仏整形外科学会は昨年の11月9日に大阪コクサイホテルで開催されたが、プログラムも例年より多彩で、日仏整形外科の交流の場としての本格的な一歩を踏み出した感じがして、大変心強く思えた。

今回の特別演者として招待したクルピエ教授は、パリーの整形外科の次代を担う人であるばかりでなく、日仏整形外科協議会（AFJO）の副会長でもあって、これからの日仏整形外科学会に深いかかわりをもつ人である。その上私がコンシャン病院で働いていた頃の同僚のポステル教授の愛弟子でもあるので、私にとってはなんとなく身近な感じのする人でもあった。同教授には“強直股関節の全関節置換術”について話して戴いた。股関節外科はコンシャン病院整形外科のメルル・ドビネ教授以来のお家藝であり、弟子のポステル教授から更にクルピエル教授へと三代にわたる長いテーマをいかに発展させていくかは容易なことではないと思われたが、きれいなX線写真とよい手術成績を見ていて、教室の伝統を感じさせるものがあった。

本学会から、事務局が大阪医科大学整形外科に移っていて、小野村教授と同教室の方々の企画と全面的なお世話を戴いたことが、本会の印象を強めることになったのではないかと思われる。その上、第1回の日仏整形外科学会青年外科医の交換研修として行かれた稲毛先生の帰朝報告があり、いかにも本会にふさわしいプログラムとなった。また最近のフランス留学の帰朝報告が澤田、田中、大橋の三先生からなされ、会員の興味を唆った。学問的な整形外科の領域にとどまらず、人との交流の機会をもつことが極めて有意義であったとの演者の先生方の意見に同感で、本会が最も強く望んでいることの一つである。また、オリジナリティーを尊ぶ考え方をもつ人々にふれ、見聞し、お互いに情報を交換できる利点も強調されていたが、本会がその機会となれば最高ではないかと思っている。

今回は日本股関節研究会第2日目終了後に研究会会場の隣のホテルで開催したこともあり、同研究会会長の田中清介教授にご配慮を戴いた。ここに厚く御礼申し上げたい。演題としても股関節関係のものが多く、荒木、久保、田中の諸先生の発表はいずれもすぐれたもので、興味深く、有用な報告をして戴いた。

学会終了後、クルピエ教授夫妻を迎えて懇親会がもたれ、会員の親睦を深めることができた。今回は、次回交換研修の先生や日本に留学中のフランス整形外科医の先生も見えて、日仏交流の雰囲気を感じさせるものがあって喜んでいる。

これまでにない絵画的な大きなプログラムをデザインされた事務局の方の創意に敬意と感謝の意を表するとともに、このプログラムが象徴するような、明るくて、のびのびとした本会の成長を心から願ってやまない。

日仏交換研修医制度の実現で思うこと

日仏整形外科学会
副会長　　菅野　卓郎

青年整形外科医交換研修プログラムが、日仏整形外科会議（AFJO）の一つの制度として発足して3年目を迎える。日本側から毎年2～3名がパリ、リヨンその他の大学、病院の整形外科におもむき、一方フランス側からは第1回(平成2年度)Dr. Collet,第2回(平成3年度)Dr. Leverneaux, そして第3回(平成4年度)はDr. Chassard とDr. dubrana が日本各地の施設において研修を行っている。それには日仏両国の整形外科学会および関係大学などの厚意と協力に負うところが大であるが、これは本当の意味での日仏交換研修プログラムといえる。わが国の若い整形外科医のフランスでの研修の希望はもちろんのこと、フランスの整形外科学会の上属部の方々もぜひ日本の整形外科を若い医師にみてきてもらいたいという意向も強く、また若いフランス整形外科医の日本での研修も大変意欲的である。このような交換研修医制度が実現したことはまことに喜ばしいと思うと同時に、一時代昔のことを思うと全く夢のようなことである。なぜならば、かつての日仏相互の国情からは想像のできないことである。

実際、私がはじめて留学した1950年頃のフランス人にとっては、日本とははるか遠くの見知らぬ異境であった。最初に私の住んでいたLille市は、それでもフランスの6大都市に入るが、私がはじめて会う日本人だという人が多かった。第2次世界大戦直後であったので、カミカゼ（特攻隊）は有名であったし、それはハラキリ（切腹）さえあえておそれぬサムライ魂によるものであると理解してはいたが、それこそ文化や文明がどうであるか、科学技術がどの程度なのかなど日本に関する認識は一般にはきわめて貧弱なものであった。ただ上記のような断片的あるいは漠然とした日本ないしは東洋に関する知識があるにすぎず、私が医者だというので、フランス人医師でさえ「ハリで治療しているのか」と聞くほどであった。敗戦国日本などは、あらゆる面において問題にされていなかったというのが真実である。

ドクターはもちろんのこと看護婦さえ車で病院にかよってくるのに驚いたものだが、毎日の食料にも不自由をしていた日本とはすべての点で極端な格差があった。医学の面においても、日本ではまだ麻酔科というものもなく、全麻はごく限られたケースにしか行われなかった時代に、フランスでは虫重炎さえも全麻下に手術を行っていた。そのように当時の日本の医学レベルに比べるとかなり進んでいて、新しい技術や器械を目の前にして驚くことが多かった。初期人工骨頭として有名なJudetのアクリル製人工骨頭をみて驚嘆したのもその頃である。はっきりいって彼等フランス人にとって敗戦国日本はどんなことがあってもフランスより上位になるようなことはありえないと考えていたし、また我々自身もそう思わざるをえなかった。日本からはいろいろの分野の人たちがフランスに留学しはじめていたが、フランスから日本にきて何かを学ぼうという雰囲気はなかった。わづかに日本語や東洋文学などの研究家が少数、それでも交換留学生という名目で来日していた。

その後ときどきフランスに行く機会があったが、10年ぐらいの間隔で次第に彼の日本観が変ってきたことは確かである。はじめの頃は、「日本の工業力はなかなかのものだ。産業、経済の成長ぶりはすばらしい」といっていたが、「そのうち我々西欧をおびやかすのではないだろうか」に変わり、ついには 「日本の経済力は完全にフランスを追い越してしまった。科学技術においてもまさるとも劣らない」ということにまでなってしまった。

医学の面では、わが国は古くから欧米の医学を学び、それに追いつくことを目標としてきた。それにはまず語学を勉強し大変な労力を費やして外国の書物を読むことによってそれを行ってきた。そしてごく少数の人たちが留学生として実際に彼等のやっていることをみることができたにすぎなかった。したがっていつまでも彼等のレベル以上にはなりえず、また語学的ハンディもあって日本の医学は無視されてきた。

しかし近年はそうではない。国際学会における日本の進出はめざましく、外国で開催される学会に日本人の数が一番多いということも珍しいことではない。先般パリで行われたTubiana教授による国際手の外科学会でも、日本から多数の演題が出され、座長もつとめるぐらいであった。いまさら日本の医学レベルが低いなどというフランス人はいないはずである。フランス整形外科医が日本での研修を希望するようになったのは、まさにこうした業績が認められてきたからこそである。

しかし、ここで我々は謙虚に考えてみる必要があろう。日本の医学、日本の整形外科はたしかに先進諸国と肩をならべうるレベルに達したといってよい。だが、たとえば多くの部門でフランス人が教えを求めるほど優れたものを多くもっているかというとそうとも思われない。世界の学者を唸らせるような独創的な業績はそうはないように思われる。来日したフランス整形外科医を前にして、ぜひご覧下さいといえる日本の整形外科をもちたいと思う。そしてまた独創的エスプリに富むフランス整形外科を従来にもまして多く学びたいものである。

平成三年度日仏整形外科学会青年整形外科医交換研修仏人研修医受入印象記
フランスより留学生を迎えて

京都府立医大
整形外科学教室（医局長）
久保　俊一

1991年11月に交換研修生として当教室に滞在したPhilippe Liverneauz, M. D. Ph. D. を大阪医大の瀬本先生とともに京都駅に出迎えたのは10月の末でした。彼はこのとき、奥さん（この方は医師）と子供さんを連れており、広島を経て京都に来る際の1週間だけの家族サービスとのことでした。一見すると細身でやや神経質そうないかにも「フランス人」という感じでした。長旅のためか、あるいは家族に会って緊張がほぐれたのか、かなり疲れた顔をしていましたが、開口一番、「ひげを剃っている間がなくてすみません」と申し訳なさそうにあいさつをされた時はなかなか細やかな気配りのできる人だなという印象を受けました。

私が医局長をしてから留学生を受け入れたのは彼が2人目でした。教授から Dr. Liverneaux の受け入れの指示があったのは、それより約6か月前だったと思いますが、一番困ったのが宿舎の問題でした。滞在期間が1か月と短期間のため大学の斡旋してくれるところの条件に合いません。そこで、ホテル、旅館などをあたってみましたが、秋の観光シーズンの京都の宿は込みあっており、すでに予約がいっぱいで、とても1か月を通して空いている部屋はないとのことでした。何とかなるだろうと、人づてに企業の保養所、宿泊所にも依頼してみましたが、11月は一杯でした。日は過ぎるばかりで、やや焦りを感じている時に、もう1人の留学生でペルーから文部省交換留学生として当教室で研修していた日系の Dr. Nakachi から朗報が届きました。彼の宿舎である国際学生の家で何とか部屋の都合をつけてくれるというのです。これには Dr. Nakachi がかなり努力してくれたようで、彼を初めて迎え入れた時の苦労が報われたような気がしました。すぐに管理人さんのところに飛んで行きましたが、その親切さには頭のさがる思いでした。こういう人がいれば外国人留学生も救われます。

私の留学経験からすると、要領を得ない見知らぬ国で勉強するのは、誠に心細いものです。ちょっとした心遣いが非常に嬉しくもあり、何気ないことでも心を痛めたりすることがあります。留学生の受け入れは、その期間だけでなく帰国後の交流を含めて長い目で見ることが肝心です。この意味でも滞在期間中の基本になる宿泊施設の充実に官・民を問わず、もっと目を向けてほしいものです。

Dr. Liverneaux の研修は手の外科、末梢神経外科中心としたものでした。教授と一緒に行った末梢神経の手術では「ハサミ、クダサイ」などと日本語もまじえてユーモアがあり、OP 場ナースの評判も上々でした。また、彼は精力的で、私が担当している股関節外科や基礎研究にも興味を示し、資料集めにも熱心でした。第一印象とは違った積極性に好感を覚えるとともに、日本人の場合もフランスでこのくらいやる vitality の必要性を感じました。

その他、11月8日には大阪で開かれた日仏整形外科学会に、私が演題発表したこともあり、一緒に参加しましたが、彼は久しぶりに接するフランス語に水を得た魚のように懇親会場を巡っていました。彼にとって毎日英語で会話しているのがなかなかのストレスであるのがよく理解できました。また、彼は平澤教授の配慮で帰国前日に教授の会長のもと開催された日本形成外科学会関西支部学術集会において「末梢神経損傷後の知覚評価について」という演題発表を行いました。日本語を一部まじえたもので、彼の積極性が表れており、参加者の好評を博しました。彼にも我々教室員にも良い経験であり、良い思い出となりました。

最後に、今回の研修受け入れが今後の日仏整形外科交流発展の一助になってくれることを願うとともに、各種の手間のかかる連絡、調整事項をきめ細かく手配して頂いた大阪医大の瀬本先生にお礼を申しあげます。

Dr. Fréderic DUBRANA を交換研修医師として迎えて

福岡整形外科病院
院長　小林　晶

今年の日仏整形外科交換研修医師はフランス側から2名を受け入れることが出来た。この中の1人が福岡にやってきた、Dr. Fréderic DUBRANA である。彼は渡日前から福岡を希望していた。手紙で言っていたのは、杉岡教授（九大）の大腿骨骨頭壊死に対する回転骨切り術の見学希望とフランスでしばしば私の名前を聞いて、Lyon の Prof. H. DEJOUR からも勧められたのが理由らしい。

Dr. F. DUBRANA は Bretagne 半島の Brest（人口20万2千人、大西洋に面した港町）にある Hôpital Augustin Morvan の résident で、32才である。出身大学は Toulouse であって Prof. FICAT, ARLET から習ったことになる。卒業後も Paris の Salpétrière でスポーツ外傷学の diplôme を取得したり、Brest での concoursd' internat で金賞を得た秀才である。その後 Tunisie, Canada などの外国留学はもちろんフランス国内でも Lyon, Paris, Toulouse などで研修を行い、その都度数多くの論文を発表している。わが国であればとっくにかなりの地位にいる人物である。フランスばかりに閉じ籠らず、視野を拡大するために大いに外国の実情を見ることをしきりと力説し、日本はフランスからすると見学して交流を深めたい国の一つのようだ。

1992年2月20日福岡に着き、早速九大と私の病院での研修が始まった。2つの病院の手術スケジュールが幸にも重ならず、フルに無駄無く日程をこなせた。

研修は手術を中心に行われた。私の病院で行われる手術は1週間約30件であり、ほとんどの分野を網羅しているが、彼は手術日は1日も休むこと無く、積極的に術前に自分の意見を述べ、自分だったらこうするとコメントし、我々の方法についての質問も高度のものであった。求めれば必ず自ら手を洗い助手につく態度で、何か少しでも新しいものがあれば持って帰り試したいと意欲満々であった。例えば、関節鏡視下手術もすでに経験があって、popliteus tendon 部の meniscus lesion の処置、discoid meniscus に対する méniscectomie plastique の可否などの質問を受けた。手の外科でも instabilité carpale の知識も豊富であった。

フランスの interne を経た外科医の臨床的訓練の素晴らしさとレベルの高さは、アメリカの resident によく比較される。エリート中のエリートである彼等の経験と知識の豊富さは、とてもわが国の同年の認定医は及ばない。

九大との合同カンファレンスで杉岡教授の好意で、彼の経験した人工股関節置換術の講演をする機会が与えられたが、その症例数、発表態度は32才の年齢での経験とは思えない堂々たるものであった。

一方、人間的にも好感が持てる好青年であった。宿泊ホテルから私の病院までは、公共交通機関では通勤がかなり複雑であったが、バスを利用すると言ってきかず、白人特有の未知のものに対する好奇心からも加わってタクシーは一度も使用しなかった。病院では我々と同じ職員食を取り歩調を合わせ、若い職員と一緒にカラオケにも美声を張り上げていた。折から桜見のシーズンでもあって、夜桜鑑賞（？）にも参加していた。

元来、私はすぐ tutoyer をする癖があって、彼にも翌日からこれで呼び掛け、話をしたが、彼は常に voussoyer であった。入室のときはドアを先に開けて、"Après-vous" といってまるで戦前のわが国を見るようで、こちらがかえって恐縮する有様であった。

かくして、2か月の研修期間はわれわれも一緒に楽しんで、束の間に過ぎた。今回の経験から言えることは、フランス臨床医学のレベルの高さ、トレーニングの素晴らしさであった。私もフランス政府給費生として Lyon の Prof. TRILLAT に接していた期間は、肉体的にも精神的にも鍛えられたが、そのことを回想すると当然と思った。

もうひとつの感想は我々の側も交換研修生をおくるときに、学問的に熱意とやる気があり、人物としても新しい文化に適応できる sympathique な人を送るべきであると痛切に思う。これがお互いの国に対してより良き理解を産み、親善を果たす手段と考える。

彼は福岡を去るにあたって「フランスでの知人、同輩、後輩の中にかなり日本に行ってみたいと言う人が多いが、是非この制度の奨学金を得て行くことを勧める」と言ってくれたときには、これまでの日仏整形外科学会の努力が実りつつあることを痛感して嬉しかった。

Dr. Marc Chassard 慶應義塾大学整形外科学教室訪問記

内西兼一郎・堀内　行雄

通常、背広のまま頭にかつらをつけ、座布団に腰を掛け、無器用に二本の箸でてんぷらを食べるのが西欧人とされてきた。しかし現代青年である Dr. マークは、箸を巧みに使い、刺身のみならず、イカの塩辛や納豆までおいしそうに食べ、趣味は絵画鑑賞ことに日本の浮世絵というのだからまことにおそれいった次第である。

平成4年6月、一か月間の予定で、Dr. Marc Chassard が、われわれの慶應義塾大学整形外科学教室を訪問され、

特に手の外科とマイクロサージャリーを勉強に来られた。卒後7年、30才の若い整形外科医で、整形外科はともかく手の外科などほとんど知らないであろうと思い、同じ年配で手の外科研修中の小竹森、関、西浦、寺田、吉川君らと同じに扱うことにした。Dr. マークの一週間は、月曜、矢部教授外来と外来手術、火曜、内西外来、水曜はモーニング・カンファレンスから始まって、手術と教授回診、木曜は手術と手の外科の特殊外来、手の外科班回診、手の外科研究会、金曜は堀内外来と手術、土曜は浦部外来 ときわめて忙しいスケジュールであった。彼は外傷病院勤務の経験が長く、手の外傷についてコメントを求めると、なかなかよい意見を言うことが多かった。一方先天異常や手の再建術については未経験とのことで、とても素直にわれわれの説明を聞いていた。われわれの下手な英語の説明でも一生懸命に聞く態度と質問には感心することがしばしばあった。いままでのジャーナルからの印象に比べて、フランスの手の外科はなかなかのものであるという印象をもった。

6月末にDr. マークの送別会を、和食と中華料理で二回おこなったが、医学の勉強のことだけでなく、彼の恋愛観、日本の印象、哲学、思想、スポーツ、芸術などいろいろな話が聞け、とても楽しい夜であった。彼の大成を大いに期待して乾杯をした。

われわれが、5月の下旬からフランスのパリで開催された国際手の外科学会に参加したので、6月4日が彼との初めての出会いであったが、フランスについて共通の話題が有り、彼も嬉しかったようだ。このように熱心で誠実な留学生がいると、われわれも活性化されて大変有意義な日々を送ることができたのは事実であった。

平成三年度日仏整形外科学会青年整形外科医交換研修帰朝報告

帝京大学　溝口病院
整形外科　**三輪　隆**

昨年12月中旬から3か月間、パリ、コシャン病院で研修をいたしました。コシャン病院は、それぞれ独立した機能、及び建物を有する各科の集合体です。整形外科の使用する建物はPavillon Ollierと呼ばれ、その中には、独自の病棟、手術室、外来、レントゲン室等があります。スタッフは、二つのグループに分かれていて、Service AはProf. Kerboullに、Service BはProf. Tomenoに統轄されます。私はService AのProf. Courpiedに師事いたしました。

病院の一日は、朝8時のカンファランスから始まります。ここでは、前日におこなわれた手術に対するコメント、前夜の緊急患者の紹介が行われます。8時15分、準備室ですでに全身麻酔をかけられた患者が、手術室に入室します。フランス人は身長もさほどなく頭は小さく、四肢は細くきゃしゃなのですが体幹部には、摂取したチーズや生クリームの成果がしっかりとあらわれていて、手術台にのぼると、たしかな重さを感じさせられました。ServiceAでは、人工股関節の手術が多く、ここでは、セメントを使用したKerboull typeを使用しています。豊富な症例をこなしているので、手術室での一連の作業が、いかにも手際よく、流れる様にすすんでいきます。解剖学的にセメントでしっかり固定するという基本概念に基づいて展開される手術は、わかりやすく、合理的に構成されています。Prof. Courpiedの手術は、実に見事で、T. H. Aを1時間40分程で、楽々と終えてしまいます。1時からの昼食時間には、教授を除くすべての医者が一堂に会し、大さわぎをします。料理は、さすがに、たっぷりとしていて美味しいのですが、そのお行儀の悪さには、エリート集団としての彼等を考えていた私は、唖然としました。この国では、医者の社会的地位はまだまだ高く、恵まれた環境にあるようです。食事がすむと平和で自由な午後がやってきます。コシャンでは外科医は、手術にのみ専念すれば良いのです。術前、術後のすべては、かわいそうな麻酔科医が責任を持ちます。もっとも彼等によれば、「彼等にできると思う？」といったところらしいのですが。

12月、1月は北半球では、最も日照時間の短い時、パリでは朝9時をすぎないと明るくならず、夕方は3時すぎには日がかげります。冬の寒さと暗さは、覚悟していたものの、陽の光のうすさは、ただでさえ慣れない生活に沈みがちになる心に拍車をかけます。月が煌々と照る朝、オーバーの衿をたて、イヌの糞と、今にも大挙して襲ってきそうな鳩の群をよけながら、朝市の準備で忙しく人々が動きまわる路地を歩いていきます。今にして思えば、なかなかに風情があるのですが、当時はただただ冷たい空気が身に凍みる毎日だったのです。次第に日も長くなり、2月に入り、朝焼けをみながら病院の門をくぐる様になると、気持ちもかなりなごんできて、「パリに住んでいる」という余裕がでてきました。市場で買物をしたり、カフェで暖をとる人々の確かな生活が、身近に感じられる様にもなりました。メトロで物乞いをする人、パフォーマンスする人、生活苦を訴える人、夏の輝く陽光の中では、観光客のおしゃべりのなかにまぎれてしまう人々の顔のなかに、春を待ちわびる思いが見える様な気がしました。

短い期間でしたが、まずはパリでの地味な生活を味わ

うことができて、大変うれしく思いました。医学の世界だけにとどまらないのですが、古いものを大切にして、かたくなに自分の流儀を守っていく彼等は、とかく流行を追いがちな日本人とは、対照的です。個人が、一人一人しっかりとした意見を持ち、過剰なまでの自信と自己主張、それでいて、他人は他人、自分は自分といった個人主義を守っているという点には、学ぶべき一面も確かにある様です。

今回、公私にわたり、面倒をみてくださったProf. Courpied御夫妻には、心からの感謝の念をささげます。お二方とも優秀な医師であり、人間的にも素敵な方です。また、留学の機会を与えてくださった日仏整形外科学会事務局の諸先生方に深く感謝いたします。

パリでの3か月の研修を終えて

北見赤十字病院
整形外科　　**末松　典明**

私は、昨年9月2日から3か月間、パリにて手の外科の研修をさせて頂きました。私にこのような得がたい機会をお与え下さった会員の諸先生に心から感謝いたします。パリにて、私は大変勉強させて頂きましたが、またほかにも様々なストレスや感動を体験することが出来ました。

私の研修させて頂いたInstitute de la main（手の研究所）には、手の外科専門医が9人いました。うち、二人がProfessorと呼ばれていました。Pro. Tubianaは、RAの手術が多く、ゆっくりと丁寧に手術していました。RAの手関節では尺骨遠位端切除後、不安定にならないように尺側手根屈筋腱にて腱固定を加えていました。時間はかかりますが、工夫を加えた、確実な結果が得られる手術をしていました。Pro. Gilbertは、今、丁度油の乗切った整形外科医で、生後3か月の分娩麻痺に対して、腓腹神経移植手術を盛んにしていました。成績は良好です。手の先天奇形やfree flapの手術も大変上手でした。また、手根管症候群は内視鏡下に経皮的に手術していました。この方法はあくまで治療用で診断用ではないとのことでした。すさまじいvitalityと形成外科医一般を嫌っていたのが印象的でした。Dr. Saffarは手関節で有名です。手根不安定症や手関節鏡の手術を見せてもらいました。舟状骨骨折にはHerbertスクリュウを用いず、キルシュナー鋼線で固定していました。ここの病院では1週間に手術が100〜150コあり、一人のドクターが半日で10くらいの手術を平気でしてしまうのには驚きましたが、手術適応が日本と少し違うようにも思いました。手の外科のレベルは日本とほぼ同じという印象でした。たいがいのドクターは二つくらいの他の病院でも働いていて、月曜日はA病院、火曜日はB病院、水曜日はC病院または研究、といったぐあいで働いていました。

言葉の問題ですが、Institute de la mainでは、私は二人のProfessorから、院内ではフランス語だけを使用するように厳しく言われ、大変不便を感じました。

Dr. マツーランによれば、フランスの医学教育は、医学部7年、軍隊1年、レジデント4年、speciality 2年からなります。1か月の所得は、およそ、一般内科25,000フラン、内科系専門医35,000フラン、外科系専門医50,000フランとのことでした。日本とあまり変わらないと思いました。

一般に、患者さんと手術するドクターの人間関係が非常に良いのが印象的でした。貴重な勉強や体験をさせて頂きました。

（以下は私の印象記です。本誌には一部不適当な内容かもしれませんが、これからフランスで研修される先生方にとっては参考となる内容もありますので書かせていただきました。）　一部省略

パリという街

パリはフランスの首都で人口は約二六〇万です。建物はほとんどが石造りで、規制のため八階以上の高層ビルはあまりありません。パリではお金持ちでも貧乏でもアパルトマン（マンション）に住み、日本のように庭付き一軒家に住むということがほとんどありません。

以前から私もパリはシャレタ街というイメージを持っていたのです。ところが意外なことに、パリの歩道には犬の糞がたくさん見かけられるのです。しかも誰も片付けません。雨に流され風に吹かれるのにまかせています。さらに、浮浪者がたくさんいます。ほとんどは白人で太っています。彼らは夜にはワインを飲んで体を暖め道端などで寝ます。それから街には黒人や東洋人、アラブ人が非常に多いのです。アフリカの旧植民地から黒人やアラブ人が来ていますし、中近東からはアラブ人が、カンボジアやベトナムからは東洋人が来ています。祖国ではまともな生活が営めないのでパリにきていわゆる3Kの仕事をしているわけです。タクシー運転手も半分以上は移民（ポルトガル、セネガル、アルジェリアなど）でした。地下鉄（メトロ）の構内は尿の臭いがします。そこで寝泊する浮浪者のせいなのです。浮浪者や乞食をパリでたくさん見かけましたが、彼らは悪いことはしません。だらしないだけです。人々に危害も加えません。パリ市民も彼らに寛容です。意外と多くの人が彼らにお金を与えます。ある時、私はベンチに座った汚い浮浪者が、丁度通り掛かった二十才くらいの美しい女性に、なにを思ったのか、ボンソワール（今晩は）と突然声を掛ける光景を見ました。すると、その彼女はニッコリほほえんで彼にボンソワールと返答したのです。私は驚きました。と

ても日本ではありえないことだと思います。

パリで大層評判の悪い人種はアラブ人です。徒党を組んで泥棒、強盗、強姦をするそうです。しかし一般にパリの治安は問題ありません。ごく一部の場所（パリ北部の一部）を除いて安全といっていいと思います。事実、私自身も危険な目にあったことは一度もありませんでした。

ところで、一般にパリなどの大都会では、人々はその歩容によって三つに区分されるといわれています。まず、早く歩いている人、これは仕事の人や生活をしている人です。次はゆっくり歩いている人、これは観光客や学生、そしてそのすじの女性です。最後に、歩道に座ったり寝てる人、これは浮浪者や乞食です。

パリの物価は東京並みの高さです。ですから貧しい人は家賃の安いパリの郊外に住んで、はるばる地下鉄やRER（郊外電車）でパリまで通います。

さて、食事は肉料理（ウサギ、ヒツジ、ブタ、ウシ、トリ）が多く、おいしかったです。ワインが水より安いというのは本当でした。ただし、この場合のワインは安いワインのことで、水は水道水ではなく食料品店で売っているボトル入りの水のことをいっています。また、パリの水道水はそのままで十分飲めます。私も毎日飲んでいましたが支障ありませんでした。ワインは一番安い赤ワインで一本六フラン（百五十円）からあります。私がパリにいる時に今年のボージョレヌーボーが出ました。いろんな種類がありますが、普通は一本六百円しません。日本では三千円になっています。運ぶ手間賃を考えても高すぎると思います。

病院内の様子

さて、INSTITUT DE LA MAINにおける病院内の人間関係については、表面的には日本と比べると職種間の上下意識や対抗意識が薄いように思いました。実はフランスは階級社会と言われています。しかし表面的には職員は医師も含めてみんな気軽に声をかけあい、明るく仕事をしています。ですが、日本と違って職場の仲間と勤務後に遊びに行くとか食事に行く、みんなで宴会をするといったことはありません。歓送迎会もなく、朝から夕方まで協力して働いてそれでチョンです。

昼休みはしっかり二時間あります。私のいた病院では昼食は中庭に幾つかある丸テーブルで一時間かけておしゃべりしながら食べる習慣になっていました。外が寒い十月の下旬でも、雨降りでないかぎりは、みんな外で食べていました。コートを着てまで食べている人もいました。食事のあとはカフェを飲み、女性の多くはタバコを吸います。その吸いかたがカッコいいのです。日本の女性のように気難しい顔をして暗く吸うのではなく、パリの女性は形よく脚を組み、空や天井を見上げてスッパッと大きく吸うのです。

病院での食事といえば、職種によって食事をする場所が違うというのも日本と大きく異なる点でした。私が研修していた病院もそうでしたし、私が宿泊していたオピタル　コッシャンという病院もそうでした。

フランスの医師たち

フランスでは医師が余っています。人口が日本の半分しかないのに医師の数は二十二万人です。この十六万人中、一万人が失業、三万人が超低賃金と聞きました。すなわち、フランスの医師の四人に一人はろくな暮らしをしていないわけです。このようなドクター過剰のため、専門分化が進んでいます。しかし外科系の医師は不足しているようでした。そもそも外科系の希望者が少ないのだそうです。それは血を見るのを嫌う国民性と長い修業期間のためだそうです。そのためか、自己紹介の時にメドサン（内科医）というよりも、シルルジアン（外科医）といったほうが尊敬されます。また、フランスでは医師のうちかなりの割合がユダヤ系であるといわれています。

私の見た範囲では、手術の適応が甘いと思いました。この原因には、給料が出来高払いになっていることがあると思います。給料と仕事の質や量との相関の低い日本のほうがいいかどうかはまた別ですが。

私が研修した病院（研究所）は教授二人のほかに、手の外科専門医の資格を持つ整形外科医が七人いました。手術の執刀は、教授か専門医に限られます。日本のように上の先生が研修医に手とり足とり教えながら手術をさせる光景は見られません。手の外科手術が毎日二十五以上ありました。それからレジデント（月給十七万円）が五人いて、国籍はブラジル、レバノン、イタリア、フランス、日本（大阪大学整形外科）でした。レジデントはみんな三十才くらいでした。彼らは六か月契約です。仕事は手術の助手と日直（朝八時から夜八時まで）です。そのほかに彼らはパリ大学の専門コースに週に一回ほど六か月通って、手の外科や微小外科の diploma（学位）をとります。これを取得して母国に帰ると、パリで学位をとったということでハクがついていいのだそうです。彼らにとって、留学の目的の第一はこのハクをつけることではないでしょうか。

貴重な体験をさせて頂いたことを心から感謝致します。ありがとうございました。

日仏生計外科学会交換研修受け入れ施設一覧　敬称略

施設名	責任者名
大阪医科大学整形外科学教室	小野村敏信
産業医科大学整形外科学教室	鈴木勝己
順天堂大学整形外科学教室	山内裕雄
九州厚生年金病院整形外科	上崎典雄
滋賀医科大学整形外科学教室	福田眞輔
順天堂浦安病院整形外科	一青勝雄
京都大学医学部整形外科学教室	山室隆夫
山口大学医学部整形外科学教室	河合伸也
岡山大学医学部整形外科学教室	井上　一
大阪市立大学医学部整形外科学教室	島津　晃
弘前大学医学部整形外科学教室	原田征行
近畿大学医学部整形外科学教室	田中清介
大阪大学医学部整形外科学教室	小野啓郎
国立大阪南病院整形外科	村田紀和
旭川医科大学整形外科学教室	竹光義治
東京逓信病院整形外科	池内　宏
九州大学医学部整形外科学教室	杉岡洋一
福岡市立こども病院感染症センター	藤井敏男
京都府立医科大学整形外科学教室	平沢泰介
愛知医科大学整形外科学教室	丹羽滋郎
札幌医科大学整形外科学教室	石井清一
金沢大学医学部整形外科学教室	富田勝郎
浜松医科大学整形外科学教室	井上哲郎
名古屋大学医学部整形外科学教室	三浦隆行
長崎大学医学部整形外科学教室	岩崎勝郎
広島大学医学部整形外科学教室	生田義和
滋賀県立小児保険医療センター	笠原吉孝
東海大学医学部整形外科学教室	福田宏明
慶応大学医学部整形外科学教室	矢部　裕
京都府立身障者福祉センター	岩破康博
福岡整形外科病院	小林　晶

1992年9月1日現在

フランス人青年整形外科医の交換研修受入れのお願い

本年度も日仏整形外科学会とフランス整形外科学会（SOFCOT）との間の青年整形外科医の交換研修を実施いたします。現在までに日本側では30数ヶ所の施設で受け入れを承諾して頂いておりますが、来年度以降さらに日本側の受入れ体制を充実しフランス側に提示したいと考えております。受け入れ期間は原則として3か月ですが、1か月でも2か月でも結構ですので是非会員の先生方のおられる施設で、フランス整形外科医の研修希望を受け入れて戴きたくお願い申し上げます。

来日するフランス人医師は、英語を話すことが条件になっております。また日仏間の旅費はSOFCOTが支給し、日本での滞在費（宿泊費、旅費）は、日本側（原則として受入れ施設）が負担することになっております。受け入れを承諾していただける場合は、事務局まで御連絡下さい。現在までに受け入れを御承諾いただいた施設は別表のごとくです。これらの施設の先生がたは、受け入れ条件等の変更がありましたら御連絡ください。変更がないようでしたら、あらためて承諾書をお書きいただく必要はありません。登録漏れや誤りがありましたら、事務局までご一報ください。

また日本から派遣する医師の募集を行なっております。お心当たりの先生がおられましたらご推薦頂きたく存じます。

平成四年度日仏整形外科学会交換研修医（日本側）

星　忠行　昭和32年2月14日生
勤務先：弘前大学医学部附属病院整形外科
留学先：Prof. Dejour（Lyon）他

村上　元庸　昭和30年3月25日生
勤務先：水口市民病院
留学先：Prof. Vives（Amiens）他

久保　俊一　昭和28年10月24日生
勤務先：京都府立医科大学整形外科
留学先：Prof. Bousquet（Saint－Etienne）他

日仏整形外科学会交換研修プログラムへの参加希望者募集要項

日仏整形外科学会では、フランス整形外科学会（SOFCOT）との間で青年整形外科医の交換研修を行っております。今年度の研修条件、応募条件等は下記の通りですのでお申し込み下さい。

1）募集人員　若干名（平成5年度）

2）研修条件

1．滞在期間は3か月間を原則とする。
（1か月単位であれば複数の施設での研修も可能である）

2．フランスでの滞在施設は希望する研修分野等に応じてSOFCOTの担当委員が最も適当と思われる施設を推薦する。ただし応募者が特定施設を希望するときは申し出ることができる。

3．費用について

a）渡航費用の一部を日仏整形外科学会が援助する。

b）フランス滞在中の本人の宿泊費と食費はSOFCOTが負担する。家族を同伴する場合は、宿泊費や食費等のすべての滞在費は自己負担とする。

c）フランス国内での移動の費用は原則として応募者の負担とする。

4．本年度の研修開始時期は4月以降とする。

3）応募条件

1．応募者は日仏整形外科学会会員であること。

2．日本整形外科学会認定医であること。

3．原則として40才を応募年令の上限とする。

4．勤務している病院または施設の責任者の承諾のあるもの。

5．フランス語または英語をはなすもの。

4）応募に必要な書類

1．日仏整形外科学会交換研修申請書

2．履歴書（大学卒業以降とする）

3．日仏整形外科学会会員2名の推薦状

4．業績目録（主な発表論文5編以内）

5．渡仏承諾書

a）大学の医局在籍者……教授の承諾書

b）病院または施設勤務者……勤務している病院または施設の責任者の承諾書（大学の医局在籍者は、教授の承諾書も要す。）

1．以外の書式は自由です。

5）選考方法

1．第1次審査は書類選考とする。

2．書類選考に合格したものには面接を行う。

3．面接の日時と場所は個別に通知する。

4．合否は1月下旬頃に通知する。

5．合格者は後日改めて仏文または英文の履歴書等、フランスでの研修に必要な書類が求められる。

6）申請締め切り　　平成4年11月末日

7）申し込み先　　日仏整形外科学会事務局
大阪医科大学整形外科内
〒569 大阪府高槻市大学町2－7
電話（0726）83－1221　代表（内線）2364
お問い合わせは瀬本まで

第2回日仏整形外科合同会議のお知らせ

日時　1992年10月4日（日）
9時30分 ～ 4時45分
場所　京都会館　会議場
〒606 京都市左京区岡崎最勝寺町13
電話 075-771-6051

主催：日仏整形外科学会　　後援：日本整形外科学会